

## ドン・キホーテの愛

### あるいは「倒錯」の創造性

トーマス・マンの「最後の愛」をめぐる

奥田敏広

#### 序章

『ヴェニスに死す』の作家が実生活においても何らかの同性愛的傾向の持ち主であったことは、日記などの資料が公開されている今日では誰も否定できない事実であろうが、さてそれではいったいそれがどういう働きを持っていたのか、つまり、それがこの作家において、ということとは彼の創造行為においていかなる意味を持っていたのかという問題となると、それこそさまざまの考え方や見方がある。

もちろん、同性愛の問題は低劣な好奇心をいたずらに煽るだけだとあっさり切り捨てる立場も当然あるであろう。しかし、この問題に一定の意味を認める場合でも、ほとんど正反対といえるような立場もあるのである。たとえば、彼が好んで引用するプラーテンの詩句「目をもって美を見し人は／すでに死にその身をゆだねたり」に

ドン・キホーテの愛、あるいは「倒錯」の創造性

端的に表現されているような美を直接に死と結びつける、世紀末のデカダンスを通してみたロマン主義的な美の把握の根底に、同性愛という形を取った禁断のエロス体験が決定的・規定的に作用しているとする見方（実際また、上記の美と死を結びつけた詩にマンは、ハイネがすでに貴族的頹廢と非難していたブラーテンの同性愛を読み込んでいたことが『結婚について』や『アウグスト・フォン・ブラーテン』を見れば分かる<sup>(1)</sup>）が一方にあるかと思えば、他方そういう非社会的なエロスの役割とは対照的に、マンが中期以降次第に社会的なものに対する関心を深めそれに関与していく際に強調する「教育」という契機における、人と人を惹きつけ結びつける建設的な力としての同性愛的エロスの把握がある。前者は、美少年タジオに魅了された「目をもって美を見し」主人公が伝染病の蔓延を知りつつ、また必死に抵抗しながらも最後には「死にその身をゆだね」る物語（主人公の名前アシエンバッハはブラーテンの生地アンスバッハのもじりである）に何よりも見事に形象化されているが、『魔の山』の二人の「教育係」ナフタとセテムブリーニの主人公ハンス・カストルプとの関係に、従来のような単に思想的・イデオロギー的問題だけではなく同性愛的エロスの作用をも読み取ろうとする後者の見方も、作者自身はつきりとそれを意識していたことを証言する資料も出てきて、随分と説得力のあるものになってきている<sup>(3)</sup>。

もっとも、この二つの見方は一見非常に対照的なものではあるけれども、ともに、あまりにも優等生的で時代錯誤的なものにと取られかねないマンの人格主義的教養主義やヒューマニズムに基づく政治参加などを、この作家の生理や病理にまで掘下げて捉えようとしている点では共通点を持っている、と言えるかもしれない。たとえばローベルト・ヴァルザーなどは、マンの印象を「帳場に座った勤勉な番頭のように書きつづけました」と述べているが、<sup>(4)</sup>

《深淵》や《根源》を標榜する思想家や破滅型とも言うべき芸術家に代表される、マンの悪い意味での職人的・

商人的「勤勉」さに対する抜きがたい不信は、以下で考察するように惑溺という側面をたしかに持っていた彼のエロス体験をつぶさに見るなら、いくぶん修正されるのではないだろうか。

とはいえ、きわめて多様な関連が考えられ、たしかに時期によっても変化していたに違いない、マンという作家における同性愛の意味について総括的にここで考察することは私の手にあまることである。私が本稿で意図しているのは、マンの晩年におけるあるエロス体験に的を絞り、まだ作品という形に昇華ないし沈澱していない、あるいは評論という形で公にされていない、できる限り彼の実生活で生じたままの、私的な個人の秘密である具体的な姿でまずそれを跡づけてみたい、つまり、ひとまずその作品の世界を離れて一度徹底的に日常生活のヴェルルまで降りて行って考察してみたい、ということである。もちろん、*「愛」*とは何かということよりもキリストは私生児かどうかという詮索に終始するような研究の本末転倒ぶりはよく分かっているつもりである。しかし、キリストが私生児かどうかということがキリスト教における*「愛」*の有り様に本質的な影響を与えていることは当然ありえることであり、それは問題意識さえはっきりしていれば大いに有効な方法に違いない。マンの創造におけるエロスの役割に関して、上述のような方法で考察したいと考える所以である。

ところで、こういう方法にとって恰好の資料がちょうど（一九九一年）出てきた。死後二十年という指定の期限を過ぎて一九七七年から出版されているマンの膨大な『日記』の一九四九〜一九五〇年の巻である。最初に出た巻には、当時執筆中の『エジプトのヨーゼフ』におけるムト・エム・エネトの愛の場面の参考にするために古い『メモ手帳』を読み、それをきっかけとしてかつての恋愛遍歴を回想した次のような記述がある。

初期のA・MおよびW・T体験は、それに比べてずっと弱い素朴なものである、そしてK・Hとのものは、人生の充足という性格を持った晩年の幸福であったが、しかし、あの私の二十五歳の時の心の根本体験が持っていた青春の感情の強烈さ、天にも歓呼するもの、深い震撼はすでになかった。(一九三四年五月六日)

ここでイニシャルで挙げられている名前はすべて調べがついており、マンの作品の中でもっとも官能的な情熱にあふれた場面の参考にされたのが同性愛の体験であったということで、引用されることの多い記述であるが、これによるなら、「人生の充足」や「晩年の幸福」とあるので、K・H(クラウス・ホイザー)がマンの最後の愛の対象であったと考えられる。当時すでにマンは還暦に近づいていたし、事実ハンス・マイアーなどは、今から考えると勇み足であったが、『デュッセルドルフに死す』と題した考察で、晩年の『欺かれた女』に描かれている初老の女性と青年の関係のモデルとして、このクラウス・ホイザーを取り上げている<sup>(5)</sup>。しかし、今回の一九四九〜一九五〇年の巻の刊行によって、マンの最晩年、なんと七十五歳の時にもう一度重要な同性愛体験があったことが明らかになり、この「最後の愛」(こういう言い方には、あのゲーテ七十四歳の時のウルリーケ・フォン・レヴュッツォーとの恋愛が念頭に置かれていると思われる<sup>(6)</sup>)は『欺かれた女』に大きな影響を与えているばかりでなく、マンの同性愛について考える際のきわめて貴重な資料になっている。というのも、他の体験の時期の日記はすべて焼却されてしまっており(現存する日記は一九三三年以降と一九一八〜一九二二年の期間)、マンの同性愛を生起したままの具体的な姿で知りえる資料は、おそらく一九四九〜一九五〇年の『日記』だけだと考えられるからである。

## 第一章 「華麗なナチ」

一九五〇年六月二十三日、講演『私の時代』を掲げてヨーロッパ旅行中のトーマス・マンは、スイスのチューリヒでかねてから滞在していた常宿ポール・オ・ラックから同市のグランドホテル・ドルダーへ移っている。戦後のマンは一九五二年に最終的にアメリカを離れるまで四回いつもこのポール・オ・ラックをいわば拠点として四カ月あまりヨーロッパへ講演旅行を行っているが、今回は、同行の夫人カーチャが「婦人病の手術」のため同市のヒルスランデン病院に一ヶ月近く入院しなければならなくなったため、一時的にグランドホテル・ドルダーに移ったのだった。この予期せぬ予定変更が思いもかけぬ出会いを生むことになる……

ドルダーへ移って三日目の二十五日に次のような記述がある。

お茶にトレービチュ夫妻。庭にて、ミュンヒェン出身のボーイ、感じがいい。エーリカはKのところ、一方Tからはまだ私のところに留まった。華麗なナチで南アメリカへ行きがっている(?)そのミュンヒェンの男は、私にサインを求めた。

当時△亡命作家▽マンはナチスに対する戦後の容認傾向にかなり神経質になっており、たとえばピアニストのヴァルター・ギーゼキングがその件でアメリカでの公演中止を余儀なくされた事件には讃意を(一九四九年一月

二十五日)、当時売出し中の「新しいスター指揮者」ヘルベルト・フォン・カラヤンに関しては、例の晩年にその真偽をめぐって物議をかもしたナチスとの関連をわざわざ日記に書き留めている(一九四九年十月三日)。「華麗なナチ」だというこの記述がどういう意味(ナチスに実際なにか関係があったのか単なる崇拜者)なのかいまひとつはつきりせず、またこれ以後はこれに関する記述はいっさいないが、しかし、もしこれが何らかの間違ひなのであれば上記のようなマンの姿勢からしてその旨の記述があるはずであり、これはむしろ意識的か無意識的かマンがこの事実から目を背けようとしていたのだと考えられる。「華麗なナチ」であるにもかかわらず、その「ミュンヒェン出身のボーイ」に明らかにマンは何がしかの好意と興味を持ったのである。

しかし、この程度の記述自体はマンの日記によくあることで、たとえば今回の旅行中でもパリにおいて「何百となく通り過ぎて行く中にすばらしく美しいアメリカ青年」(五月十三日)などであるように特別珍しいことではない。事実今回もその後しばらくは、二十八日のこととして「あの小さな『ミュンヒェンの男』による給仕」とある以外には何の言及もされていない。すでに二十日に手術をうけたものの容態のもうひとつ思わしくないカーチャ夫人のことや、ちょうど始まった朝鮮戦争のことに関する逐一の几帳面な言及があり、家庭の良き夫であり遠く離れた極東情勢にまで深い興味を示す△ファシズムの闘士▽としてのマンの姿が窺われる部分である。

しかし、その間もマンはホテル内で何回か「ミュンヒェンの男」と挨拶を交わし、彼を観察していたのである。一週間後の七月二日のこととして次のような記述がある。

いつもあのテーゲルン湖の小さな男が私に輝くばかりに挨拶し「素晴らしい晩ですね！」などとと言う。何と

感じのいい目と齒！「何と魅力的な声！」

いささか突然の感嘆文の出現に驚かされるのであるが、続く三日にはこの「テーゲルン湖出身のフランツ」から給仕を受ける時、その出身地や名前などを聞いた（「ヴェスターマイアーとかいう」姓であるが、しかし彼にとつては「フランツ」という名が「肝心」であつたという。空想で呼び掛けるためであろうか）という記述があり、またもや「何と愛らしい顔、何と心地よい声」という感嘆文がある。外見は少し馴染みになつたホテルの客とボーイにすぎないのだが、この客の心の中では単なる好意以上のものがたしかに進行しつつあつたのである。七月八日の日記では、そういうマンが自らに起こりつつある事態に次のような省察を加えている。

その青年に対する感情は実に深いものになつてゐる。絶えず彼のことを考え、簡単なきっかけとなるような出会いを引き寄せようと試みている。彼の目はあまりにも感じがよく、彼の声はあまりにも甘く心に取り入るのだ、私の欲望はそれほどではないが、それでも私の喜びと情愛、夢中は熱狂的なもので、一日をすべて葬ってしまう。彼の喜ぶことで、彼がジュネーブへ行くのやその類のことで助けてやりたいのだが。私が彼を気に入っていることを、たしかにずっと前から彼は気づいてゐる、——もちろんそれは私の望みでもあるのだが。

そして翌九日には親しい訪問客の役者カズラーの話聞きながらもマンは、「テラスにF・Wが現れないかと期待しているので興奮してしかたがない」と書き、彼に今起こつてゐる状態の重要性について、そして相手のフ

ランツの容姿について次のように書き記す。

要するにもう一度これなのだ、もう一度愛、一人の人間に捉えられること、彼を得ようと深く望むこと——二十五年以来それはなかったが、もう一度私に起こることになっていようとは。〔中略〕うなじはあまりにも無骨。体つきはがっしり。ほぼ二十五歳ぐらいに違いない、少年ではなく、青年。とび色の髪、少しウェーブしている。手は考えていたより華奢。

「二十五年以来」というのは序章で述べたクラウド・ホイザーとのことを念頭においているのであるが、後半の細かい記述には、ちょうど色好みの通が対象を抜け目なく吟味しているような、きわめて官能的な視線が背後に感じられる。そして三日後の十一日の日記には、ランツへの熱狂がいかに激しいものであったかを窺わせる次のような記述がある。

世界的名声は私にとってまったく何でもない、それは、彼の微笑み、彼のまなざし、彼の声の柔らかさに比べれば何とささいなことだろうか！

しかしながら、このランツとの関係は、**外面的に見るなら**、いわゆる $\Delta$ 何事も起こらない $\nabla$ ままに終始したようである。それはマンが、「これほど心を捉えられているにもかかわらず、積極的行動と企てに対する嫌悪」

(七月十一日)をずっと持っていたからであり、そういう気持ちの根底には「現実における合一と抱擁の幸福は非常に疑問である」(八月十六日)という彼の考え方があった。その後のマンの足取りを簡単に辿ってみると、七月十六日には、かねてからの予定ではあるものの、彼は「逃げる」ようにしてホテルを去って静養のためジュス・マリニアに滞在する。翌月の十一日には再びチューリヒに戻ってくるが、フランツのいるドルダーではなく元の常宿ボール・オ・ラックに泊り、十七日にはアメリカへ帰国すべく飛行機に乗る。その間、なるほど「最後の愛」の思いが私をずっと満たしている」のでジュス・マリニアのすばらしい「湖や山の眺めは私にあまり訴えるものがない」(七月十六日)という状態ではあったものの、そしてそういう思いのあまりマンは居たたまれずフランツに手紙を書きその返事を受け取って「感動し幸福」(七月二十六日)を感じはするものの(この手紙をマンはあの『魔の山』でプリービスラフ・ヒッペから借りたとしている鉛筆のように大事に保管していた)、また帰国前にはマンがドルダーをわざわざ訪ねて行きフランツとの再会が実現はするものの、ふたりの手紙の内容は型通りのほとんど儀礼的なものであり(マンの手紙はフランツの転職の希望を問い合わせるものでありフランツのもはそれに対する丁寧なお礼)、束の間の再会もまた丁寧にもよそよそしいものであった。

マンが日記において事実を隠しているのではないか、という疑惑も必ずしも頭から否定できるものではないが、この七十五歳にもなった老作家が現実のフランツとの対応においては、フランツの容姿を書き留める時の通の視線とは対照的に、まるで清純きわまりない乙女のような反応を示している(彼は相手のごく儀礼的な挨拶や感謝に再三「感動」している)ことから考えても、ふたりの間には、たしかに外面的にはやはり何事も起こらなかったものであり、相手のフランツにとっては、なるほど注目と何がしかの好意が注がれているのを感じはするもの

の、マンはあくまで一介の通り過ぎていくお客のひとりに過ぎなかったものと思われる。

しかしながら、かといって、フランス体験はマンという作家にとってもまた旅先の単なる一エピソードに過ぎなかったと考えるなら、それは大きな誤りだと言わねばならない。それは、たとえばこの《政治的人間》が当時置かれていたきわめて困難な政治的・社会的状況とこの体験との関係を考えてみればよく分かると思われる。

周知のように、マッカーシー旋風の吹き荒れる戦後のアメリカの偏狭な反共主義に対してマンがいかに危惧を感じていたか、そしてまたそういうアメリカの国籍をもちながらあくまで東西両ドイツでゲート講演をやっているようなマンが、いかに微妙な立場にあったかはよく知られている。そもそもニューヨークの国会図書館でも行うことになっていた今回の旅行の講演『私の時代』がそこでは中止せざるをえなくなった、というのには有名な話である。しかし、新しく出てきた手紙や日記という資料によれば、マンの主観的にはそういう状況はもっと厳しいものであり、実際またそれだけの事件が現実起こっていてもいたことが分かる。たとえばアメリカに対する怒りが、普通彼に特徴的なさまざま配慮なしにそこでは吐露されている。

自明きわまりないこととして言われていることが、ここでは狂気であり大逆罪となるであろう。この国は、権力と未成熟の間の矛盾によって気が狂っているのだ。(一九四九年十二月七日)。

こういうアメリカの状況の中で、マンは再びヨーロッパのどこかへ移住すべきかどうか、また移住するとしたらどこがいいかを、ひとり、あるいは家族とで真剣に何度も考察しており、そういう中で一九四九年と五〇年

の長期ヨーロッパ講演旅行が行われたのであるが、当然予想できるように、それらは「移住のための偵察」(二月十九日)という側面も持っていた。

これらの内四九年のヴァイマルでのゲーテ講演が大変な物議をかもしたことは以前からも比較的よく知られているが、五〇年の時にもある意味ではそれより危機的な状況があったことが、日記によって初めて明らかになる。それは朝鮮半島での戦争の勃発であるが、これに対してマンはきわめて大きな危惧を抱いていたのである。状況をめぐってゴロをも加えた家族で何度も相談が行われ、またテオドーア・アドルノなどもすでにドイツへ帰りながら、<sup>(8)</sup> どうか帰っていたからこそドイツの状態のひどさを実感して、そこまで「根本的に」考えずアメリカへ戻るよう手紙で勧めてくるが、マンは「一九三三年のアローザの記憶を生き生きと」思い出し、「二度目の亡命の考えがずっと前からとりついて離れない」(七月十八日)と日記に再三書いている。すなわち、彼にはあの『リヒャルト・ヴァーグナーの苦悩と偉大』の講演旅行が結果的に亡命となったことが思い出され、全権賦与法によってヒトラー独裁となったドイツ第三帝国と朝鮮戦争に深入りするアメリカが重なり合わずにはいないのである。そして、この朝鮮戦争勃発の最初の記述とフランツへの最初の言及は、日記のまさにちょうど同じ日に、すなわち六月二十五日に書き記されている。つまり「二度目の亡命」の可能性という、存在を根底から揺す振られかねない危機状況の中で、そしてその危機状況にもかかわらず、上述したようなフランツへの「愛」が進行していたのであり、そういう後者はマンにとって、前者と少なくとも同じ重大性を持つものだったと言わねばならない。ジルス・マリーアからサン・モリッツの湖山溪谷の絶景を前に静養しながらも、マンの心は二重の憂憤と憂悶に閉ざされていたのである。

さらにそういうマンに、「状況は一九三三年よりひどくより危険である」とまで思わせるような事件が最後に起こる。結局少なくとも一旦はアメリカへ帰ろうと決心したマンたちのところへ、「ニューヨークへ到着するとエーリカはエリス島へ送られるかもしれないという彼女の秘書ヤコブソンの知らせ」が届くのである（八月十六日）。結局はマン夫妻だけがまずアメリカへ返り、その後エーリカも無事合流するのであるが、一時はそれこそパニック状態で、ヤコブソンや息子ゴーロも交えて何度も協議されるとともに、マンは「私の憤慨と激昂は例のないものだ」（八月十七日）とまで書き記している。しかし私が注目したのは、その後の彼の気持ちを記した次のような記述である。

私の気分は鈍重で投げやりなものになり始める。エロスのなものの秘密に関する考察、小説に関する熟考さえもが、焦眉の命にかかわる問題に混入してくる。（八月十九日）

こういう時にさえ創作のことが頭から離れないのはいかにも『困憊の極で仕事をする』業績の倫理家<sup>(9)</sup>らしいが（帰国の決心をする最大の理由のひとつも、完成間近の『選ばれし人』をとりあえず仕上げるためであった）、その創作と並んで、あるいはそれ以上に「エロスのなものの秘密に関する考察」がマンの心を占めていたというのである。この「エロスのなものの秘密に関する考察」に、彼のフラッツ体験が大きくかかわっていたことは言うまでもない。冒頭で述べたようにあくまでフラッツ体験に即しながら、それほどまでマンの心を捉えていたという「エロスのなものの秘密」について、以下の章でさらに考察し、多少なりともその「秘密」を明らかにでき

ればと思う次第である。

## 第二章 ペデラスティとプラトニスムス

それにしても、本稿で取り上げている「最後の愛」のみならず冒頭で言及したようなマンの生涯の愛は、その相手が男性であり、いわゆる同性愛、あるいは彼は結婚し子供もいたのであるから両性愛ということになる。しかし、マンの場合今日普通に言う同性愛、あるいは両性愛とはかなりその内容が違う、と言わねばならない。

それはまず第一に、マンの相手が、単に同性というのみならずきわめて限られた年代、すなわち大人になりきらない青年ないし少年であった、ということである。前章で見たように、よく言われる金髪碧眼でないこともあったが、その年齢は、学校時代から老年の「最後の愛」に至るまですべてこの年代であったことは共通している。このことは、マン自身もはっきり自覚しており、日記においても何回か言及されている。たとえば、『神のごとき青年』のすばらしさはあらゆる女性的なものをはるかに凌駕して、

それに対して感受性がないなどということは私には軽蔑するほど不可解なことだ、

という記述さえある（八月二十八日）。そういう意味でそれは、同性愛には違いないが、むしろ古代ギリシア人たちの言っていたペデラスティ（若者愛）という言葉の方がふさわしいのではないかと思われるのである。また、

これらの関係においては、求愛する側とそれに応えたり拒否したりする側がはっきり固定していたのであり（もちろんマンは前者である）、そういう点でもそれは、エラスト（恋する者）とエロメーヌ（恋される者）をはっきり固定していたペダラスティの恋愛様式と一致している。

さらに第二には、今日でもまだ同性愛と言うと必ずタブーとか罪、あるいはその裏返しとしての禁じられたものの持つ隠微な喜びとか禁忌を犯す快楽、などという諸関連を脱しきっていないことは誰でも認めるであろうが、マンの場合今よりたしかにそういう関連の強い社会にいたにもかかわらず、先の引用からも推測できるように、そういう反体制としての社会性やあるいは罪をめぐる倫理性とさえあまり関係のない所にペダラスティがあったのではないかと考えられる。何しろ彼は「それに対して感受性がないなどということは私には軽蔑するほど不可解なことだ」とまで書いているのである。

ただしこれは、同性愛という感情や行為がそもそも▲異常▼ではない、というのではない。たとえば『レオナルド・ダ・ヴィンチの幼年期のある思ひ出』においてすでにジークムント・フロイトは、「たとえもっとも正常な人間でも性における同性の対象選択は可能であって、生涯に一度ぐらゐはそれを経験したことがある」と述べているが、<sup>(10)</sup>この問題を考えるには、私には精神分析学や医学の知識があまりにも不足している（マンの『日記』の編集者インゲ・イェンスは、前章で見たような激しい熱狂にもかかわらずマンが「観察」者に終始しているところから、即座に否定はするものの、彼は「窃視症」ではないかという疑問を投げかけているが、<sup>(11)</sup>これもどう判断してよいか私には分からない）。そうではなくて、マン自身の意識の中で、同性愛がそういうものとして必ずしも捉えられていなかったのではないかと、ということである。そういう点で同性愛は、それや両性具有と並んで

彼の性的複合体を構成していた近親相姦とは決定的に違っているように思われる。後者が、二重の近親相姦による罪と恩寵によるその救済を描く『選ばれし人』に端的に示されているように、マンにとってタブーや罪の象徴的存在であったのに対して、前者は、いわゆる△倒錯▽としてマン自身に意識されてはいなかったのである。この点でもまた、マンの同性愛は古代ギリシアのペデラスティに近いと言わねばならない。

もっとも、ペデラスティが古代ギリシアにおいてはほんとうに醜聞から免れていたかどうかは、周知のように問題がある。たとえばハンス・マイアーはその『アウトサイダー』の「ソドム」と題した部分で、「歴史とそれについて報告している文学において同性愛者たちはもっぱら悪を行う者、犠牲の捧げ者として現れる」と述べ、<sup>(12)</sup>同性愛に基づく一種の醜聞の歴史を展開しており、これが近代のヴィンケルマンやプラーテンだけではなく古代ギリシアにも適用されることを具体的な古代のテキストを例に挙げて説明している。これに対して、たとえばミシュル・フーコーはその『性の歴史』の中で、古代ギリシア人たちは同性愛と異性愛に本質的な違いを認めていなかったと述べ、このことは彼らの間で同性間の愛が非難されているテキストがあっても必ずしもその反証とはならないと言う。というのもフーコーによれば、ギリシア人たちの愛に対する評価基準は、同性か異性かではなく、能動的か受動的か、自己を支配し自制できているかどうかにあったのであり、このことが結果的に多くの非難すべき男性同性愛の例を生みだしそれを「ある曖昧な交渉関係」としていたからだとい<sup>(13)</sup>う。

しかし、歴史的にはどうであれ、マン自身は、内面的には非常に自由に同性愛のことを考えていただろうということが、少し後で詳しく見るように、少なくともさしあたっては他人の目を気にする必要のない日記の記述から推測できるのである。たとえば同性愛を扱うことの多い現代の作家フーベルト・フィヒテは、『私は満足でき

ない——アウグスト・フォン・ブラーテン<sup>14</sup>ハラーミュンデ伯爵の感情の物語について」と題するエッセイの中でマンとブレヒトの同性愛観に触れ、双方とも「エイズ迫害」のキャンペーンに大いに利用できると皮肉を言っている。<sup>(14)</sup>これは、マンが好んだ「美を見し人は／すでに死にその身をゆだねたり」という詩句に典型的に表現されているような、同性愛と死との大仰なロマン主義的一体化に現代の作家が反抗して、同性愛はある意味でごく《普通》の現象だと言いたいのであるが、フィヒテの見方は誤解であって、マンの同性愛観はむしろ現代の同性愛者たちのそれに近い面があったと言っても過言ではないと思われる。

とはいえ、マンが、同性愛が近代の社会では禁忌としての性格を強く持っており、ワイルドやジッドのように大きな醜聞になり攻撃の材料として利用される恐れがあるのをはつきり意識していたことはたしかである。たとえば、フランツに逃れ難く「捉えられ」始めていた七月十日の日記には、チューリヒのカンマーシュピール劇場の役者であったエルヴィン・カルザーと、「当地で信じられないほど広がっているホモセクシャルのことや、自分の地位を最高度利用しているヴェルターリンのことについて」話したとある。オスカー・ヴェルターリンはマンとも親しかったカンマーシュピール劇場の役者兼監督であるが、この件に関して「それがスキャンダルにならないのは不思議だ」と彼はわざわざ書き留めている。

しかし、たとえば逆説的にも「エロティシズム」の思想家ジョルジュ・バタイユが、なるほどタブーを絶対化せず時代や社会による恣意的変化を認めながらも、同時にその根源にある性への「嫌悪」や「嘔吐」を、そしてタブーをある意味で認めている、すなわち自然なものとしてではなく「自然の否定」による人間化の契機として認めているのとは違い（もちろんバタイユの思考はここで終わるのではなく、タブーの「侵犯」を第二の否定と

して「聖なる」行為と見做し、こういう二重の所与の否定の中に、すなわち「自然の否定」としてのタブーとそのタブーをさらに「侵犯」することとの、緊張を孕んだ動的な永遠の拮抗の中に人間存在の真の有り様を見る<sup>(15)</sup>、マンの場合は、同性愛の禁忌の意味についての考察や自覚があまり見られないのである。現在では、たとえばユング派の精神分析などは、意識と無意識に呼応する形で性にも重層構造を仮定し、男性にはアニマという女性的なもの、女性にはアニムスという男性的なものを仮定しているようで、そういう立場からすれば同性愛は必ずしも常に異常なものとは限らない<sup>(16)</sup>、ということになる。またそういう精神分析の動きも影響しているであろう、現代のゲイたちは彼らがよく普通の自然な存在であるとして、第三の性としての市民権を求めてさまざまの方面で運動を繰り広げている。マンの場合もちろんそこまで積極的に態度を表明することはなかったし、こういうところに「市民時代の代表者」<sup>(17)</sup>のどうしようもない限界をみる人もいるであろうが、しかし、その内面の意識においてはたしかに彼らゲイたちの主張を先取りするようなところがあつたと思われる。それは、たとえば△倒錯▽の形而上学に囚われた専門家なら往々にして見逃すかもしれないが、かえて何の先入観もなくマンの日記を読もうとする人なら気づくに違いない、次のような事実から推測することができるであろう。すなわち、同性愛といえ△人目を憚る秘め事▽という印象がどうしても離れないのであるが、マンの場合必ずしもそうではなかったのである。

もちろん、先にも述べたように、禁忌の意味はともかく、その事実をはっきり自覚していたマンがこのことをオープンにしていた、というのではまったくない。「市民時代の代表者」は一般には臆病なほど慎重であつて、たとえばフランツのことに關しても日記にみられる次のような自戒を常に心得ていたようである。

ありふれた積極性や攻撃性は、そして彼にどれほど気があるかを試すことは、秘密を命じる私の人生にふさわしくない。(七月十日)

しかし、状況と相手によっては対応は変わるのである。

たとえば、ミュンヒェンとカリフォルニアを通じてマン家の隣人であった作家のアルフレート・ノイマン夫妻宛の手紙でマンは、「原ミュンヒェン人」という夫妻に「もちろんいたずら小僧ですが、世界でもっともかわい目をしたミュンヒェンあるいはテューゲルン湖のボーイ」のミュンヒェン訛りを話題にし、「彼が輝くのを見るために彼を甘やかしています」と、告白するような調子とは程遠い気安さで自分の気持ち語っている。<sup>(18)</sup> こういう事情であるから、マンとその家族（といってもこの場合旅行同行者の夫人カーチャと長女のエーリカであるが）の間でフランツのことが秘密でなかったことも充分考えられる。事実七月七日の日記には、フランツと話しながらその顔をじっと見ているマンに、まわりの視線を気にしてエーリカが「袖を引っ張り、抑えきれずに私を叱った」とあり、さらにこう続いている。

美しいプードルに対する喜びとそれほど違わないとエーリカに言った。実際これはまたそれほど性的なものではないのだが、エーリカはそれをあまり信じなかった。

ちなみに、マンは非常に犬をかわいがり、あまり事情を知らない人が読めば人間と間違うばかりの親密さで日記でもしばしば言及しているが、この少し前にも十一年間も飼ったニコと呼ばれる犬がいなくなった時には大騒ぎしている。それはともかく、エーリカが「叱った」とあるのはあくまで世間一般を憚ってのことであって、かの女自身必ずしも困ったことだと思っていた節はない。むしろ、ジルス・マリーアで休養中のマンにもう一度フランチに会う機会を作るためにホテル・ドルダーへ寄るよう計らうのは、ほかでもない彼女なのである（八月一日）。一方カーチャ夫人の方も、無事退院してから、マンが「彼に好意を持っている」ことを聞かされるのみならず、フランチと接する時にはそういうマンの「ために彼に対して親切」にさえする（七月十三日）。そして、注目すべきことにも、こういう三人の間でフランチのことが、秘密どころかむしろ再三にわたって積極的に話題にされている。すでに七月八日には「二人と冗談めかして彼と私の好意について」とあり、九日後の十七日の記述にはこうある。

食事の際、小さなヴェスターマイアーに私の推薦を申し出るもくろみに関して、エーリカやKと少しユーモラスな会話。適切さと自然さの問題。うまくいく。

「私の推薦」とは前章で述べたフランチのジュネーブへ行きたいという希望に関してのことであるが、この十一日後の二十八日の記述を見れば、これらの「会話」が憂慮すべき深刻な事態について話し合うというのではまったくないことがよく分かる。

それにしても、エーリカがああの出来事、彼との会話、五フランのプレゼントなどについて冗談を言う時ほど私に好ましいことは何もない。

要するに、これらの記述からは、マンたちがフランツの件を「倒錯」とはおおよそ対極にある微笑えましいエピソードとして扱っていたとしか考えられないのである。

もっとも、ここが重要な点であり、また現代の同性愛者たちとの違いもそこにあるかもしれないが、同性愛が「倒錯」でないということは、必ずしもそれが「普通」のことであるという意味ではない。マンにおいては、同性愛が単に「倒錯」でないというばかりではなく、逆に正常かつ理想的なものとして大きな価値付与がなされているのである。「倒錯」の美学ではなく、いわば愛の理想主義なのであり、この点でもまたマンの同性愛は、そこからプラトンの『饗宴』で展開されているようなエロス論を生み出した古代ギリシア人たちのペデラスティに近いと言わねばならない。事実、マンはフランツとの件でもプラトンのエロス論を念頭においていた。このことは、フランツとの体験の最中に書かれ「その中にフランツル体験がたぶん充分入り込んだ」（七月三十日）という『ミケランジェロのエローテイク』に明白に読み取れる。これは、フランツのいるホテル・ドルダーを去りジュルス・マリーアで静養するマンのところに、かねてから知り合いであった作家のハンス・ミュレシュユタイン訳によるミケランジェロの恋愛詩が送られてきて、フランツのことを忘れられないマンは、同じように七十を越えても恋愛に捉えられ相手の中には同性もいたというミケランジェロの恋愛詩にすっかり夢中になり、そこに自身

のフラントツ体験も重ね合わせながら一気に書きあげたものである。そして、ここでは、同性愛と異性愛がまったく区別されていず、トマソ・カヴァリエリとヴィットリア・コロナナの場合が具体的な例として並列的に言及されたり、「輝かしい青年であろうと華やかな婦人であろうと」という副文のように、ミケランジェロの両性愛がさり気なく示唆されているとともに（このエッセイが始めは省略した形で発表されているのはおそらくこういう内容が原因と考えられる）、ミケランジェロの恋愛詩が「プラトニスムスのエローティックの古典的実例」と規定されている。

ただし、「プラトニスムス」とは言っても、少なくともマンの場合それは必ずしも官能性を否定するものではない。そもそも日本のみならず普通に日常で使われるプラトニック・ラブはこの点で一種の誤用であって、むしろ徹底的に禁欲的なのは中世に発明された宮廷風騎士道恋愛という様式であろう。きわめて変形した形では恐らく現代にまで続いてきているこの様式は、元来は障害と苦しみを望んで求めるようなところがあり、肉の欲望を厳しく禁止するとともに同性愛も厳禁しているきわめて禁欲的・苦行的なものである。それに対してマンの「プラトニスムス」は「途方もない官能性に根づいている彼のエローティックの超官能性」などと表現されていて、官能性を頭から否定はしないのである。ただ、マンは「情熱と並んで美が単に官能だけの問題に過ぎない者たちを軽蔑する」<sup>(24)</sup>のであり、こういう「プラトニスムス」のエロスの有り様はさらに次のように説明されている。

至高の星々から一つの輝きが降りてくる——それがこの地上では愛と呼ばれる。それは精神を天に、地上の

ドン・キホーテの愛、あるいは「倒錯」の創造性

九

ものを神的なもののところへ運ぶものである。<sup>(25)</sup>

プラトニスムス、すなわち神的なもののペールとして美を、神の愛の写しとして情愛を信じること。<sup>(26)</sup>

そして、あの『饗宴』の中のエロスは「肉体の上でも心霊の上でも美しいものの中に生産すること」を求めるといふ部分と反響し合いながら、エロスの創造性が強調される。<sup>(27)</sup>

愛は、彼の創造性の基盤であり、靈感を与える守護神、原動力、彼のきわめて男らしくまたほとんど超人的な作品の灼熱する推進力であった。<sup>(28)</sup>

こういふ「プラトニスムス」は、現実のマンのフランツに対する関係の中にもその片鱗がたしかに見出される。前章で引用したような、フランツのうなじから髪の色まで細かく書き留めた日記の記述には、マンのきわめて官能的な視線が想像されると同時に、彼がもっぱら惹かれるのが、体ではなく顔、特に目であることから始まる日記の次のような省察（七月十九日）は、彼の愛の「プラトニスムス」を明白に示している。

彼と寝ることは快いことに違いないだろう。しかし、私は彼の体に関して特別な思いはないし、それに情愛を感じるのには彼の目のため——すなわちほとんど何か「精神的なもの」のためである。ミケランジェロのプラトニスムスの影響だろうか？

そして、マンはミケランジェロの恋愛詩の中にある、きわめて官能的であると同時に官能の創造性を誇った詩句（ちなみにこれは先のエッセイの結びにもなっている）、

お前の息のなかで私の言葉は結ばれる

をよほど気に入っていたのであろう、日記でフランツに言及した時にもしばしば繰り返し引用している。

しかしながら、たしかにマンのフランツへの思いの中には「プラトニスムス」の要素が見出されるにしろ、そこで「プラトニスムス」はあくまでマンの理想であり志向に過ぎない、すなわち、それはフランツの場合における彼のエロスの有り様に影響を与えてはいるが、それがそのまま現実の彼のエロスの有り様のすべてでは当然のことながらないということを、我々は忘れてはならないだろう。たとえば、本章で紹介したフランツをめぐるマンの家族での「冗談」は、どう考えても「プラトニスムス」の理想主義からは説明できないように思われるのであるが、次章ではこの点をさらに考えてみることによって、マンにおける「エロスのなもの秘密」についてさらに掘下げて考察したい。

## 第三章 トリスタンとドン・キホーテ あるいはイゾルデとドゥルシネーア

マンがフランツとの件を微笑えましいエピソードとして家族での談笑の題材にするのを非常に好んだという事実は、前章で述べたように、マンが同性愛についてかなり自由な見方をしていた証左だと考えられるが、しかし、マンの志向するものが「プラトニスムス」だとするならば、どういふわけで彼はそういう談笑をことの他好んだのであろうか。普通に考えるなら、そういう「冗談」は茶化しとしてむしろ「プラトニスムス」の障害になるとし、か思われないのであるが、マンはいったい何を考えていたのだろう。それにまた、談笑の相手である夫人のカーチャや娘のエーリカはそれぞれ何を考えていたのであろうか。彼女たちもまた、マン自身と同じように、かなり自由に同性愛のことを考えていたのだろうか。しかし、マンの情熱が非常に深刻なものであるなら、それは家族のこれまでの秩序を壊すことになり、それは妻としてあるいは娘として困ることには違いない。それとも、彼女たちは、談笑の「冗談」を文字通りに取り、マンの情熱を軽く考えていたのだろうか。

まず後者の二人の場合から考えると、この二人がマンの情熱について実際の程度知っていたのか日記の記述からははっきりしたことは分からないが、前章の愛犬に対する好意と比較した引用からも分かるように、少なくとも娘のエーリカは必ずしも無邪気な感情とばかり思っていなかったことはたしかであろう。ひょっとしたら彼女たちは、マンの気持ち真剣なものであることをある程度知りながらも、マンが最終的には現在の家庭秩序を破壊するような行動にはでないことを長年の経験からも信じていて（少なくとも外面的には実際またそのように

事態が展開したことは第一章で見た通りである)、心のどこかでは安心して高を括っていたのかもしれない。彼女たちの落ち着いた用意周到ぶりの対応からは、少なくとも彼女たちもまたこの種の事態を何回も経験していることが想像できるし、マン家の一致団結した協力ぶりについては他にもいろいろ例があるからである。<sup>(29)</sup>

それはさておき、しかし、私がここで一番問題にしたいのは、マン自身の考えと意図の方である。第一章でみたようにたしかに真剣で激しいものであり、そしてまた第二章でみたように「プラトニスム」を志向していた自身の感情を、彼はいったいどういうわけで家族の「冗談」の題材にしているのであろうか？

たとえば、こういうことも考えられる。フランツとの件を完全に全部隠すことはどう考えても到底不可能なので、マンは、あえてその一部を無邪気で軽いものに歪曲した上で家族に話していたのではないだろうか、ということである。これによって、この体験に実は秘められている真の危険をかえって隠蔽できるだろうかである。

しかし、もしそうだとしたら、こういう密かな意図のことが日記で少しも言及されていないのはおかしいと言わざるをえない。日記においてまで家族の目を憚る必要はとも考えられないからである。こういう歪曲による隠蔽という解釈は、私にはどうも穿ち過ぎた解釈のように思われる。やはり、家族でのフランツをめぐる「冗談」は、歪曲ではなくマンのある意味での本意であったに違いない。

とするなら、しかし、なぜまた「冗談」なのだろうか？ この問題に関しては、すでに本稿でも言及してきたプラテンについてのマンの講演が重要なヒントを与えてくれるように思われる。それはマンがフランツを知るかなり前の一九三〇年に行われたものではあるが、既述したように美とエロスの問題に関してマンはプラテンに日頃から深く傾倒していたばかりではなく、興味深いことに、フランツとの一件があった直後にプラテンの

詩を何回も読み返しており、しかもその際実現はしなかったものの「プラターテン・エッセイをさらに大きな論文に拡張する」(十月二十一日)計画さえ持っていたことなどを考えるなら、マンのフランツ体験にプラターテンの密接な関与を予想することは、きわめて自然なことだと思われる。

ところで、マンのプラターテン論においては、あらゆる現世の規範を破りひたすらイゾルデを愛する、「死に溺れ死を故郷とする暗鬱な騎士道」<sup>(30)</sup>の体現者としての「プラターテン||トリスタン」という見方がまず提示されている。例の「目をもって美を見し人は/すでに死にその身をゆだねたり」というプラターテンの詩句(『トリスタン』という題がついている)に定式化される愛の形而上学である。しかし、その後でマンは、さらに「プラターテン||ドン・キホーテ」という命題をそれにつけ加えて打ち出す。

プラターテンの騎士道は、ただ単にトリスタンの悲しみをもっているだけではありません。ただ単にこの意味において悲しい騎士というわけではありません。彼はまたグロテスクで感動的に滑稽な意味において悲しい騎士でもあります、一種のドン・キホーテでもあるのです。<sup>(31)</sup>

このラ・マンチャの騎士のたしかに善良で純粹ではあるがまた妄想に基づく熱狂でもある狂気に関しては、否定的な姿と考えるか(たとえば『ミメシス』のエーリッヒ・アウエルバッハ)<sup>(32)</sup>、あるいはあの『白痴』のムーシキン公爵にも比すべきある種の聖なる狂気と見做し、そこに(偉大なる過去をみるかまだ実現せぬ未来を見るかは別にして)英雄的・悲劇的な偉大さを見て肯定的に考えるか(たとえばバタイユ)<sup>(33)</sup>、あるいはまた否定的

ではあるにしてもその狂気を通じて現実の社会の問題点が明らかにされていると考えるか、それこそさまざまの見方があるであろう。が、マンが言おうとしているのは一見は単純なことである。つまり、「本当は百姓娘である」<sup>(34)</sup>あのドゥルシネア・フォン・トボソこそ崇高きわまりない愛を寄せるべき徳高い貴婦人であると信じて疑わないドン・キホーテに、「平凡な少年たちの健全な成長以外の何物でもないもの」<sup>(35)</sup>に崇高な愛を寄せるプラテンの姿を重ねているのであり、プラテンの少年愛の「崇高」さにその対象がふさわしいものではなかった、と言いたいのである。

我々はここにさらにマン自身の姿を重ねることもできるであろう。すなわち、マンは彼が激しい情熱を寄せる当の相手の価値を同じように低く見ていたのではないか、ということであり、実際このことは日記の記述の端々から読み取れる。

たとえば、ジルス・マリーアでフランツからの手紙を待っている時にマンは、「もちろん彼は書くことが苦手である」(七月十七日)などと心配したり、実際また彼の手紙の「文法的誤り」(七月二十六日)をわざわざ書き留めている。また、相手が作家であることを考慮して故郷の文豪たちのことを話題にするフランツに対してマンは、「彼はガングホーファ、トーマ、スレッツァクを知っているのが大変得意なのだ」(七月三日)などと感想を漏らしている。これは必ずしも冷たい皮肉ではなく、むしろそこには暖かさが感じられるのであるが、少なくともフランツの知的レヴェルをマンが相当低く考えていたことは否定できないであろう。さらに彼はフランツへの愛の性質について、ヘルダーリンの詩句「もっとも深く考えたものはもっとも生き生きしたものを愛する」(『ソクラテスとアルキビアデス』)によって説明しようとしたり(七月八日)、またすでに引用したことであるが、フ

ランツを「いたずら小僧」と呼んだり、愛犬と比較したりしている。「もっとも生き生きしたものの」などという評価も、それだけを取り上げて考えれば決して否定的なものとは言えないが、先に引用したような一連の文脈に置いてみるなら、どうしても△軽薄さ▽を美化した迂言のように思われてくるのである。

これが必ずしも恣意的な深読みでないことは、親しい作家ジークフリート・トレービチュと娘エーリカとの間に生じたちよっとした事件に関して、彼が思わず洩らしている次のような感慨のことを考えてみればよく分かる。すなわち、八月六日の日記には、マンよりも高齢ですでに当時八十歳にもなっていたトレービチュがエーリカに「首っだけ」になり、「彼女に恋の別れの詩を朗読」したのに対して、彼はしみじみと「年老いたトレービチュの状態の方がよい」と感じた、と書かれている。問題はその理由である。それは、同じく非常に高齢ではあるものの、トレービチュの相手が異性であり、マンの相手が同性であるからではない。前者の場合、「美しい目と並んで、性格、精神、人格、機知、才能が、きわめて正当で騎士的に彼を首っだけにしていた」からこそなのであった。実はこの時マンの念頭にあったのは、直接的には、彼がその日倦まず観察していた美しい肢体を持つテニス・プレーヤーなのであるが、間接的には、その頃まだ彼が激しい情熱を感じていたフランツのことも考慮されていたことはたしかである。つまり、忌憚なく言うなら、フランツの場合どうしても「性格、精神、人格、機知、才能」などという資質に欠けるというわけである。マン家におけるフランツをめぐる談笑における「冗談」が、百姓娘を徳高い貴婦人として崇拜する滑稽な騎士、という照明の下に生じたものであると考えると考えてはば間違いないと思われる。要するに、七十五歳にもなったノーベル賞作家にしてファシズムの闘士が、別にどこという取り柄のない平凡なホテルのボーイに夢中になって、というのである。

しかも、こういう情熱の有り様は、必ずしもフランツを相手にした時だけではどうもないようである。マンの同性愛を考察した初期の研究者の一人イニャス・フォイアリヒトも、まだフランツとのことに関しては何も知らなかったが、マンの愛には絶えず「軽蔑」という要素が大きな位置を占めていることを強調している。<sup>(36)</sup> 実際またマンは、すでに青春時代にあの『トリーニオ・クレীগー』の中でも、「たいして細くもなく、たいして上品でもない手」への、つまり、「誘惑的に平凡な」ものへの愛である「凡庸性の歓喜」を詩いあげていた。<sup>(37)</sup> なるほどここでは、「ごくわずかの軽蔑」<sup>(39)</sup>を認めながらも、全体としては心地よい叙情性の内に「凡庸性の歓喜」が理想化されている。しかしそういう「凡庸性の歓喜」も、それが現実になるなら、ドン・キホーテの愛としてのグロテスクなまでに滑稽な姿を露呈するはめになりかねないことを、フランツをめぐる日記の記述ははっきりと示しているのではないだろうか。

しかしながら、とはいえ、プラーテン論においてもマンは、ドン・キホーテを単に「滑稽な」騎士と見做していただけではもちろんない。彼はこの騎士を、

崇高な愚かさ、報いられることのない、時代に合わない、常識ばなれした、忿激やかたない、年中侮辱され打ちのめされてばかりいて徹底的に笑いものにされた高潔心と戦闘心<sup>(40)</sup>のとりことなって駆りたてられる放浪の魂。

を持つ騎士として「敬愛する」とも述べている。しかも、重要なのは、そこでドン・キホーテとトリスタンがと

もに「悲しい騎士」と呼ばれることによって、その類縁性が暗示されていることである。これは、小説『ドン・キホーテ』の対象が対象としてはあくまで神話『トリスタン』とまったく同じである、つまりドン・キホーテとトリスタン自身は一見そう見えるほど異なっていない、同じ宮廷風騎士道恋愛愛の実践者としてはあくまで同じである、とマンもまた考えていた証左と見做してよいであろう。ただ、この同じ両者を見る視点が小説と神話では決定的に違うのである。小説を叙事詩の発展形態と考える見方もあるが、この点に注目するならば、たとえばオルテガが言うように、小説と叙事詩はまったく相いれない別の形式ということになる。すなわち、オルテガによれば、『ドン・キホーテ』は小説の典型にして最高峰であり、その対象に対する詩的態度は「神話」や「叙事詩」とまったく違い、後者が「英雄」の「崇高」な意志や行動、感情のみを問題にするのに対して、前者は近代リアリズムの認識的・批判的理性を通して対象を見ようとする。したがってまた、「小説」は必然的に「叙事詩」の世界の崩壊過程であり、また多かれ少なかれ喜劇的性格を持つということにもなる。<sup>(4)</sup>マンの用語を使うならば、小説は叙事詩の、『ドン・キホーテ』は『トリスタン』の一種のパロディーなのである。そしてその結果、恐らくは同じ一人の人物が、片やトリスタンとして片やドン・キホーテとして表現されることになる。

このことは、換言するならば、あのイゾルデとドゥルシネアもまた、一見そう見えるほど正反対の人物である必要は必ずしもないのではないか、ということにもなる。つまり、フランツが「凡庸」な若者であり、彼への愛を「滑稽」にしていたものは、必ずしもフランツ自身の有り方であるばかりではなくて、彼を見る者の態度の結果でもある、ということである。このことは、次のような、明らかにフランツよりも「教養ある」相手であったパウル・エーレンベルクの場合を考えてみればよく分かる。

本稿の冒頭でも述べたように、フランツ以外の「恋人たち」との体験については、日記によっては回想という形を通してしか知るすべはないのであるが、その中のパウルの「私の人生においてたしかにただ一度しかなかった陶酔」<sup>(42)</sup>だという青年時代の関係に関しては、当時まだ親密に相談していた兄ハインリヒへの手紙やとりわけ『メモ手帳』<sup>(43)</sup>を通じてかなり具体的に知ることができる。創作用メモ兼日記であった後者はすでに三十年も前にハンス・ヴースリングが分析し、あの浩瀚なペーター・ドゥ・メンデルスゾーンの伝記も<sup>(44)</sup>それを詳細に扱っており、それらの成果は多くのマン文献においても言及されている。ヴースリングらの実証的研究ではパウルへの愛は同性愛と名指しては扱われていないが、第二章で述べたような留保をつけるならそれは同性愛には違いないのであるから、同性愛として言及されるのもそれはそれで当然なことであるが、残念なのは、その際に往々見られるセンチシヨナルな恣意性であり、ヴースリングらの実証的研究が力説している論点が無視されていることである。これは、私がすでに十年ばかりも前に問題にしたことなのであるが、その力説<sup>(45)</sup>されている論点とは、簡単に言う<sup>(46)</sup>と次のような点である。

精神的なものであると同時に官能的なものでもあったこのエロス体験においてマンは、相手の画家の「教養ある無邪気さ」のおかげで「精神的に近いものだった」という<sup>(46)</sup>関係について、たとえば次のような非常に冷徹な分析を『メモ手帳』に書き留めている。

彼は浮気のために生まれてきたのであって、愛や友情のためにではない。僕らの友情もまた一つの浮気だ。そして僕は確信しているが、もしこれが浮気でなかったら、彼にとってこの友情はより魅力のないものとなっていたら<sup>(47)</sup>う。

マンは、この「私の人生においてたしかにただ一度しかなかった陶醉」においても、社交界の寵児である相手の軽薄さを見出さずにはいられないのである。のみならず、当時マンはこの体験を基にアデライードとルードルフを主人公とする小説『恋人たち』を構想していたが、『メモ手帳』には、この両者のこととして書かれていることが少し後では「僕」と「P」のこととして出てくるという例さえある。その場合、手紙などの記述から確認できるように、マンは小説のために考案したことをその後で実生活において演技したと考えられるのである。このような計算し尽くされた演技の中に、たとえばヴェスリングは、「実生活が芸術のために生きられている」という一種の芸術至上主義を見ているが、私はむしろ「陶醉」のさ中にも貫徹される徹底した理性的・批判的認識を見たいと思う。この認識こそが「教養ある無邪気さ」をあたかも外科医のように残酷に解剖させ、結果的にグロテスクなまでの「滑稽さ」が暴き出されずにはいないのである。

#### 第四章 エロスとイロニー

さて、マン家のフランツをめぐる「会話」における「冗談」が、少なくともマン自身にとっては以上のような意味における認識的・批判的理性の視点に立つものであったと考えるなら、マンのフランツ体験は、第二章で述べた「プラトニスムス」とはいささか異なった趣を持ったものだと言わねばならないであろう。つまりこの場合それは、「プラトニスムス」の理想であるにせよ宮廷風騎士道恋愛のそれであるにせよ、一面においてたしかに

理想主義的な側面を持つてはいたが、しかし他方また、理性的認識の攻撃を絶えず受け「滑稽」に墮さずにはいないものでもあったのであり、それはこの両者の拮抗という形を取るのである。まだフランツを知る前に書かれた次のような日記の書き込みは、こういうマンのエロス体験の有り様を簡潔に定式化している。

最近多くの苦悩に満ちた欲望があり、欲望の本性と目的について、自らの幻想性への洞察と抗争するエロスの陶酔について熟考。(一九四九年十二月四日)

しかし、さらにマンのエロス体験について考えていくと、こういう共存する二つの要素が、実は必ずしも「抗争」しているのではないのかもしれない、と考えられてくる。それは、たとえばすでに『非政治的人間の考察』においてマンが、「エロスとはひとりの人間を彼の値打ちとは無関係に肯定することである」<sup>(49)</sup>とはっきりと述べているからばかりではない。何よりも、ここで取り上げているマン家の談笑におけるフランツをめぐる「冗談」について、すでに述べたように、それ「以上に好ましいものは何もない」とまでマンが書き留めているからこそなのである。つまり、この「冗談」における否定的認識が彼の情熱と対立するものであるとするなら、なぜそういう認識に基づく「冗談」を彼がそれほど「好ましい」と思うのか説明できないのである。それとも、マンはそもそも情熱を避けたいと思ひ否定的認識を歓迎したのでらうか。しかし、実際においてその否定的認識が情熱の障害にはほとんどならず激しい情熱が続いたことは、第一章で詳しく見た通りであり、しかも、日記によればそれによってマンがその種の「冗談」を歓迎しなくなったということもないのである。あるいは、精神と肉体、認

識と欲望などという二元論を仮定するならば、否定的認識によってかえって官能の欲望を増大させる、というような精神にとつては自虐的ともいえる欲望の構図が考えられないこともないが、マンにとってエロスの情熱は肉体的・官能的であると同時に精神的なものでもあったことは、これまた第二章で論じたことである。とするならば、マンにおいては、そもそも精神と肉体、認識的理性と根源的生というような二元論が、彼自身よく利用する思考の図式ではあるが、実は必ずしも適切ではないのであって、彼のエロス体験においては、否定的認識と情熱が対立して、あるいは独立して存在しているのではなく、両者が判然とは区別し難く、しかもお互いを高め合って共存しているのではないか、そしてそれがいわば「善悪の彼岸」にあるひとつの絶対的・根源的なエネルギーとなっているのではないか、と考えられる。たとえばマンは多分にエロスのものを含んでいた彼のヴァーグナーへの情熱についても次のように語っている。

私のヴァーグナー熱は、まさにこの批評と心理学への屈折によってはじめてそれを刺激するもっとも繊細にしかもっとも鋭い刺を受け取ったのであり、まさにこの屈折によってはじめて真の情熱になった。<sup>(50)</sup>

第二章でマンのエロス体験は普通の意味での「倒錯」ではないと述べたが、もしそこにもかかわらず「倒錯」があるとするれば、それは今まさに述べたこと、すなわち、否定的認識と情熱が必ずしも対立せずむしろ高め合いながら共存しているということこそが「倒錯」なのではないか、と私には思われる。実際、「かの最高美を目指して絶えずいよいよ高く昇り行くこと」<sup>(51)</sup>をめざす「プラトニスム」の立場からすれば、否定的認識によって却

て情熱が高められるという事態は、まさに△倒錯▽以外のなものでもないに違いない。

実際また、マンがまさにそのような意味で△倒錯▽という言葉を使っている例がある。たとえば『詐欺師フェーリクス・クルルの告白』の中に、作家のウブレ女史と主人公クルルの情事が語られる部分があるが、そこでウブレ女史は美少年クルルへの愛を「倒錯（Verkehrtheit）」と呼んでいる。それは何も、前者が歳とった富裕な上流階級の何不自由のない女性であり、後者が若くて貧しいエレベーターボーイであるからばかりではない。何よりも、前者が「最高に知的な女性」であるのに後者が「精神的ではない」人間だからこそなのである。ウブレ女史はクルルとの恍惚とした抱擁の中で、愛の「倒錯」性を次のように讃えあげる。

倒錯よ！ 愛はまったくもって倒錯なの、それは倒錯以外の有り様はできないの。<sup>(52)</sup>

さらに、マンにおけるエロスの有り様を以上のようなものと考えて初めて、たとえば次のような最近よく引用される彼の言葉もその真の意味が理解できるのではないだろうか。すなわち、一九一九年九月十七日の日記には次のような書き込みがある。

夜ブリュリアを読んだ。一面的であるが真実。『考察』もまた私の性的倒錯 (sexuelle Invertiertheit) の表現であることは私自身にとって何ら疑う余地がない。

『男性社会におけるエロティックの役割』の著者でドイツ・ヴァンダーフォーゲル運動の指導者のひとりであるハンス・ブリュアとマンの関係は、『考察』の中にそのことが出てくることもあり以前から知られてはいたが、「性的倒錯」という刺激的な言葉が使われていることもあってか、この言葉だけがひとり歩きました形でよく引用される記述である。たとえばヘルベルト・レーネルトなどは、男性同性愛の価値を説いたブリュアとの関連でこの言葉が出て来ているところからも「性的倒錯」をごく普通の同性愛の「倒錯」と考えて、『考察』自身の中にある「精神」と「生」の関係について述べた次のような部分を説明として引用している。<sup>(53)</sup>

両者のあいだには合一ということはありえず、合一と伝心とのつかのまの恍惚とした幻想があるに過ぎない。解決することのない永遠の緊張があるだけである。<sup>(54)</sup>

マンはこういう関係をさして「エロスのな関係」と言うのだが、なるほどここで言う「エロス」を同性愛と解釈すれば、それは今の引用のような「精神」と「生」の「合一」なき関係の比喩になりえることはたしかであろう。しかし、ここでの「合一」がなく「幻想」が存在するだけだという関係を単に同性間の関係だからという事実のみに結びつけてこと足れりというのは、あまりにも単純な解釈だと言わねばならない。というのも、周知のように『考察』は「精神」と「生」の対立をめぐるものであるばかりではなく、何よりもデモクラシーとしての政治から彼が言うところの音楽としてのドイツ文化を擁護し、後者への彼の《愛》を表明したものであったからである。しかも、「性的倒錯」はたしかにブリュアとの関係で理解されねばならないが、これはレーネルト自身

も強調しているように、ブリュエアは同性愛を決して「病理的」とは、すなわち普通の意味での「倒錯」とは考えていないのである。とするなら、マンの言う「性的倒錯」は、単なる同性愛ではなく、本稿で具体的に分析したようなマンのエロス体験の有り様を指していると考えたほうが妥当ではないだろうか。すなわち、『考察』において告白されているドイツ文化とその担い手としてのドイツ市民層への「愛」は、同時にそれへの批判的・解体的認識を含むものであり、しかも、この両者が対立するというよりむしろ奇妙なことにも相乗的に互いを高め合って共存している状態を「倒錯」と表現しているのではないか、ということである。そもそも『考察』においてマンが、決して素朴かつ手放しにドイツ文化への「愛」を表明しているのではまったくなく、それどころか、そこには「普通」の場合であればまさに嫌悪にしかつながらないような厳しい批判的・解体的認識があることは、『考察』を注意深くかつ何の先入観もなく素直に読むなら自明のことである。にもかかわらずマンはそこでドイツ文化を擁護しているのであり、これがまさに「倒錯」なのである。

またこのように考えると、つまり『考察』はなるほど政治論であり文明論でもあるのだが、実は「倒錯」した「愛」こそがその隠された（というか体裁に惑わされないならむしろ露骨すぎる）真のテーマだと考えると、いわゆる転向におけるこの書の位置も少々違ったものになるのではないだろうか。それを政治的マニフェストとして読むからこそ、ヴィルヘルム帝国の擁護者とヴァイマル共和国の支持者のあいだの亀裂が問題になるのである。エロスの有り様が問題だとするなら、誤解をおそれずにあえて言うなら、それらはある意味で二次的な問題になるからである。『考察』においては、その本質の一部においてたしかに「非政治的な人間」が、にもかかわらずその「倒錯」したエロスの作用によって「政治的」な姿勢を鮮明にしていることこそが問題なのであって、

そういう意味では、それをあくまで転向と呼ぶとしての話であるが、『考察』の後でそれが始まるのではなく、むしろまさに『考察』によってそれは始まっていると言わねばならない。マンのような資質の持ち主にあつては、ひとたび「政治的」になりさえすれば、次に共和国支持者になるのは、転向というよりもむしろ自然の流れなのである。

それにしても、こういう錯綜した状態は普通は『考察』の最後の章名にもなっているイロニーという言葉によって説明されることが多い。しかし、ひとつにはイロニーはあまりにも手垢にまみれた概念であり、またそれは、『考察』で定義されているように『精神』が『生』のためにする自己否定<sup>(55)</sup>と捉えるにせよ、後の『ゲーテとトルストイ』においてははっきり示されているような両極の「中間のパトス」<sup>(56)</sup>と捉えるにせよ、あまりにも拒否的・解体的な作用を強調して示しているため、マンはイロニーという言葉を避けて上記のような姿勢を日記においては、『考察』は「性的倒錯」である、と表現しているのだと私は考えたいのである。これはまた換言するなら、マンにおいてイロニーの概念はなるほど徹底して冷徹なものではあるが、往々そう理解されるようには必ずしも拒否的なものではなくて、むしろ△求愛する▽情念の根源的な力としての側面を決して見落としてはならないということでもある。そして、このように考えるなら、マンという作家においてはエロスとイロニーはほとんど同義であると言って過言ではないであろう。現に『考察』の中には次のような言葉がある。

エロスはつねにイロニーカーであった。そして、イロニーとはエロティックである<sup>(57)</sup>

ここでのエロスが、単なる比喩でもなければまた象徴だけであるにも留まらず、マンの現実のエロス体験を踏まえていることは、本稿のこれまでの記述を読んでもらえば分かるであろう。マンの「倒錯」したエロスの有り様は、彼の文学の根本概念であるイロニーの有り様にまで決定的に関与していると言わねばならないのである。

たとえばマンがその最晩年のラジオ討論において、「イロー」を「アポロ的なものの芸術原理」と規定して「エラスムスの微笑」と結びつけ、「フモール」を「心の底から湧き上がる笑い」と結びつけた上で、前者より後者を「芸術の作用としてより高く評価する」と述べ<sup>(58)</sup>、「私はいつもイローニカーと見られるよりもフモリストと見られる時に嬉しく思う<sup>(59)</sup>」と彼がよく「イローニカー」と評価される事への不満を口にするとき、なるほどこれらの言葉をそのまま鵜呑みにすることはできない。それは、彼が「アポロ的なものの芸術原理」としての「イロニー」をやはり何ととっても芸術の必要条件と考えていた節があるからで、このことは、彼が『考察』を「芸術家の作品」ではあるが「芸術作品」ではない<sup>(60)</sup>ということにあんなにも固執するのを見ても分かる（その中で「ラディカリズム」に対して「イロニー」が高く評価されているにもかかわらず、『考察』には彼の「芸術作品」のような「イロニー」があまりなく、赤裸々な情念がほとんど剥き出しになっている。長男のクラウスは「あの頃の父の顔には父の性質の本質に属している善良さもイロニーも見られない」と回想しているが、まさ<sup>(61)</sup>にこういう特質のために、『考察』と、無味乾燥な事実の羅列の間に赤裸々な情念のほとばしりが見られる『日記』は、「イロニー」に統御された彼の多くの「芸術作品」よりもおそらく『現代的』である。また、クラウスも面白いことに『考察』のマンをドン・キホーテに譬えている<sup>(62)</sup>が、クラウスの見落としていたのは、『ドン・キホーテ』の主人公と違い、マンの場合はドイツ文化とそれを支える市民階級が「貴婦人」ではなく「百姓娘」に過ぎないこと

をあくまで認識した上で熱狂していたという、『考察』の「倒錯」した論理と情念の有り様である。しかし他方たしかにそこには、彼に対してあまりにもしばしば、そして安易に使われるイロニーという概念がどこか誤解されているという思いもたしかにあったに違いないのである。

もしマンのイロニーが、普通よく言われるような冷やややかな理智に富んだ拒否的・解体的なものに終始するものであるとしたら、その時には彼はほんとうに「非政治的人間」になっていたのであろうし、人間界の現象すべてに超然とした反語と「エラスムスの微笑」をもって臨んでいたことであろう。その時にはまた、今日あるマンの膨大な作品群は生まれず、彼は大きないちじくの葉の影に座して黙って微笑していた古代の賢人たちのようになっていたかもしれない。しかし実際には彼のイロニーは、もっと情念にまみれた泥々したものであったのである。なるほど彼の理智的な側面も生半可なものではなく、その冷徹さはたしかに「すべての肉と血に対する愛の欠如」と「氷のような人間嫌<sup>(63)</sup>い」という一面を持つてはいる。しかし、にもかかわらずそれはやはりあくまで彼の一側面であって、彼のうちにはまた△求愛する▽エロスの強烈なエネルギーが働き続けていた。ちょうど『ドン・キホーテ』の作者が、恐ろしい敵が何の変哲もないただの風車であり、崇高な愛を寄せるべき貴婦人が無骨な百姓娘に過ぎないことを一方においては残酷にも容赦なく暴き立てるにもかかわらず、他方においてはドン・キホーテに風車と戦わせ、百姓娘を愛することを決してやめさせないのと同じように。

[注]

本稿において引用したトーマス・マンの著作および日記は以下の版による。

Thomas Mann: Gesammelte Werke in dreizehn Bänden. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. S. Fischer 1974.

Thomas Mann: Tagebücher. 1918-1921, 1933-1943. Hrsg. von Peter de Mendelssohn. S. Fischer 1977-1982. 1946-1950. Hrsg. von Inge Jens. S. Fischer 1986-1991.

著作は巻数(ローマ数字)とページ数(マヨロマ数字)を、日記は年月日を示したが、一九五〇年の日記だけは月日のみ示した。

(1) Thomas Mann: Über die Ehe. X, S. 196f. Thomas Mann: August von Platen. IX, S. 269f.

(2) たよべに Karl Werner Böhm: Die homosexuellen Elemente in Thomas Manns "Der Zauberberg". In: Stationen der Thomas-Mann-Forschung. Hrsg. von Hermann Kurzke, Königshausen + Neumann 1985, S. 145-165.

(3) たとえば、一九五〇年十月二十三日の日記には『魔の山』を再読した時の感想が次のように記されている。「『教育的なもの』におけるエロスのものは、結局のところかなりはつきりと目立っている。セテムフリーニの快活で辛そうな微笑。ハンス・カストルプはまったく魅力的だ、……それが分かるセンスを持っているならば」。

(4) 『ヴァルザーの小さな世界』、飯吉光夫編訳、筑摩書房 一九八九年、一七七頁。

(5) Hans Mayer: Thomas Mann. Suhrkamp 1980, S. 408-426.

(6) 一九五〇年の日記においても、本文で引用したようなかつての△恋人たち▽の羅列が一度ならずあるが(七月十一日、七月十六日)、その際『文学史』には載らないだろうが(七月十一日)とわざわざ書かれているのは、逆にマンが、文学史がギリシア神話におけるゼウスのそのように数え上げるゲートの恋人たちのことをかなり意識していた証左だと思われる。

(7) 一九五〇年九月十五日の日記には、ヨーロッパ講演旅行のカバンを取り出し、「その中にはフランツ・ヴェスター

- マイアーの手紙もあり、それは私にとってW・Tの鉛筆とまったく同じくらい値打ちがある」とある。W・Tは本文での引用にも出てくるが、マンの学校時代の友人ヴィルリ・ティンペ。
- (8) マンの『日記』の編者インゲ・イエンスによれば、一九五〇年八月一日付けのアドルノの手紙がトーマス・マン・アルヒーフにあり、それが『日記』の注に引用されている。
- (9) Thomas Mann: *Betrachtungen eines Unpolitischen*. XII, S.145.
- (10) Sigmund Freud: *Eine Kindheitsenerinnerung des Leonardo da Vinci*. In: *Gesammelte Werke* Bd.8, S. Fischer 1945, S.169. つじつもフロイトは例の抑圧と昇華による理論を展開している。すなわち同性愛が生じるひとつの例として、父親の影響のほとんどないあるいは父親がそもそも存在しない環境で(ダ・ヴィンチも幼年期に父親がいなかった)、「一般に母にたいする非常に激しい性的な結びつき」(S.169)が存在し、それを抑圧した場合が挙げられており、この場合その者は男を求めているのではなく、「母への愛情」のために「女たちから逃げまわっている」(S.170)のだという。さらにダ・ヴィンチの場合は、「そういう性抑圧が「知識欲へと昇華」(S.147) として圧倒的な探究欲になつた稀な例だという。
- (11) Thomas Mann: *Tagebücher 1949—1950*. S. Fischer 1991, S. VIII.
- (12) Hans Mayer: *AuBenseiter*. Suhrkamp 1975, S.175.
- (13) ミッナル・フロー 』『性の歴史』 快楽の活用』 田村俊訳、新潮社 一九八六年、一三七—二八頁。
- (14) Hubert Fichte: *Homosexualität und Literatur 2*. S. Fischer 1988, S.196.
- (15) ジョルジュ・ンタイン『エロティシズムの歴史』 湯浅博雄・中地義和訳、哲学書房 一九八七年。パタイユは、たとえば、彼の意図するものが決して「エロティシズムの護教論」ではないと断り、「人間的な美存は性的事象全体に恐れや嫌悪を抱くよう命じた——」が、この恐れや嫌悪それ自体が、エロティシズムの魅惑力という価値を定めたのである」(二十頁)と述べている。
- (16) 河合隼雄『とりかへばや、男と女』 新潮社 一九九一年。特に第四章「内なる異性」(一一九—一五九頁)。
- (17) Thomas Mann: *Goethe als Repräsentant des bürgerlichen Zeitalters*. IX.
- (18) 一九五〇年八月一日付のアドルノの手紙がトーマス・マン・アルヒーフにあり、それが『日記』の注に引用されている。 Hrsg. von Peter de Mendelssohn, Heidelberg 1977, S.88.

(19) Thomas Mann: Die Erotik Michelangelo's. IX, S.785.

(20) 本稿で使用したマン全集も新しいフランクフルト版全集 (Gesammelte Werke in Einzelbänden. Leiden und GröÙe der Meister. Hrsg. von Peter de Mendelssohn, S.Fischer 1982) もともとは「チャーリヒの雑誌『ドゥー』」一九五〇年十号に「詩におけるミケランジェロ」と題してこのエッセイが初めて公表されたことだけを記しているが、日記によればそれは「清められた」もので「原文の形」ではないという(十月二十五日、二十七日)。

(21) *ibid.*, S.786.

(22) ドニ・ド・ルージュモン『愛について——エロスとアガペ』(原題は『西欧と愛』鈴木健郎・川村克巳訳、岩波書店 一九五九年。これは西欧の愛の本質に迫ろうとしたすぐれた著作であるが、ルージュモンによればそれは「トリスタンの神話」に具現された宮廷風騎士道恋愛という様式の中にあり、そこにおいて「情熱とは苦悩を愛し求めることにはかならず」、「人びとは心ひそかに障害を願っている。必要とあれば、障害をつくりもするし空想もする」という(六一—六三頁)。

(23) *ibid.*, S.791.

(24) *ibid.*, S.786.

(25) *ibid.*, S.786.

(26) *ibid.*, S.787.

(27) プラトン『饗宴』久保勉訳、岩波書店 一九六五年。一一六頁。

(28) *ibid.*, S.792.

(29) たとえばこれは厳密な意味での家族ではないが、日記によればハインリヒ・マンの死に際してその書き物机には「たくさんの卑猥なスケッチ」があり「彼は毎日太った裸の女を描いていた」というが、エーリカはそれらを目にふれないように、「クラウスに関する怪しげな原稿」といっしょにハインリヒの家から取って来たという(三月十二日)。

(30) *ibid.*, S.271.

(31) *ibid.*, S.271f.

ドン・キホーテの愛、あるいは「倒錯」の創造性

- (32) エーリッヒ・アウエルバッハ『シメーシス』篠田一士・川村二郎訳、筑摩書房 一九六七年。アウエルバッハによれば「この狂気を象徴的・悲劇的に解釈することは強引にすぎ」、「テキストにはどこにもそんなことは書かれていない」(下巻一一一頁)。
- (33) 上掲書。「セルヴァンテスの作品ほど自らの対象である際限なき愛を嘲弄しつつ、最終的には深く尊重している例はめったにあるものではない」(二二七頁)
- (34) *ibid.*, S.276.
- (35) *ibid.*, S.272.
- (36) Ignace Feuerlicht: Thomas Mann and Homoeroticism. In: *The Germanic Review*. 1982, S.90.
- (37) Thomas Mann: Tonio Kröger. XIII, S.282.
- (38) *ibid.*, S.302f.
- (39) *ibid.*, S.281.
- (40) *ibid.*, S.272.
- (41) ホセ・オルテガ・イ・ガセッタ『ドン・キホーテをめぐる省察』長南実訳、白水社(『オルテガ著作集』I) 一九七〇年、「第一の省察」(小説に関する小論) 一一二—一七五頁。
- (42) マンの一九三四年五月六日の日記。
- (43) 本文にあるように以前はヴェスリングからの紹介によってその一部が窺われるだけであったが、最近になってその全体が出版された。Thomas Mann: *Notizbücher*. Hrsg. von Hans Wysling und Yvonne Schmidlin, S. Fischer 1991.1992.
- (44) Peter de Mendelssohn: *Der Zauberer*. S. Fischer 1975.
- (45) 日本独文学会京都支部一九八二年度秋季発表会『トーマス・マンのパウル・エーレンベルク体験について』。
- (46) Thomas Mann: *Lebensabriß*. XI, S.107.
- (47) *ibid.*, S.67. (Notizbuch 7).
- (48) Hans Wysling: *Aschenbachs Werke*. In: *Euphorion*. 1965, S.278.
- (49) *ibid.*, S.568.

- (90) *ibid.*, S.74.
- (91) 土曜新聞 一三六頁。
- (92) Thomas Mann: Bekenntnisse des Hochstaplers Felix Krull. VII, S.445.
- (93) Herbert Lehnert, Eva Wessel: Nihilismus der Menschenfreundlichkeit. Thomas-Mann-Studien Bd. 9. Klostermann 1991, S.78.
- (94) *ibid.*, S.569.
- (95) *ibid.*, S.25.
- (96) Thomas Mann: Goethe und Tolstoi. IX, S.171.
- (97) *ibid.*, S.568.
- (98) Thomas Mann: [Humor und Ironie] XI, S.802.
- (99) *ibid.*, S.803.
- (99) *ibid.*, S.10.
- (19) Klaus Mann: Der Wendepunkt. edition spangenberg 1976, S.68.
- (92) *ibid.*, S.68ff.
- (63) 友人の作家クルト・マルテンスの言葉で、一九〇六年三月二十八日のマンのマルテンス宛の手紙の中に引用されてゐる。Thomas Mann: Briefe 1889-1936. Hrsg. von Erika Mann, S.Fischer 1961, Bd.1, S.61.